

二〇一三年度 卒業論文

浄土真宗の観点から見る自死問題

L  
1  
0  
0  
0  
0  
4

荒川  
季紗

目次

序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

本論

第一章 現代日本が抱える自死問題の実態

第一節 《積極的自死》について・・・・・・・・・・・・・・ 2

第二節 逃避的性格の《消極的自死》について・・・・・・・・ 5

第三節 他殺的性格の《消極的自死》について・・・・・・・・ 7

第二章 浄土真宗における自死の捉え方

第一節 『西方指南抄』から見る《積極的自死》の受け止め方・・・・・・・・ 10

第二節 煩惱具足と逃避的性格の《消極的自死》・・・・・・・・ 13

第三節 業縁と他殺的性格の《消極的自死》・・・・・・・・ 14

第三章 親鸞思想による自死問題へのアプローチ

第一節 自死が与える影響とその受容・・・・・・・・・・・・・ 18

第二節 慈悲の心と繋がりの回復・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

第三節 ライフマネジメントの実践・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

註

資料

參考文獻

參考論文

## 序論

現在の日本は世界の国々の中でも経済的に恵まれ、文明が発達し、モノに溢れた豊かな国である。しかし、その一方で毎年約三万人の人々が自ら命を絶っているという深刻な問題を抱えている。これを十年のスパンで見ると三万×十で三十万人になるわけだが、この三十万人という数字は地方都市の人口に匹敵する。少し稚拙な例えだが、地方都市がぼつかりとなくなるイメージを想像してもらえれば、日本の自死問題の異常性がよりはつきりと感じられるであろう。

警視庁が毎年発表している『自殺者数資料』（資料1）によると、一九九八（平成十）年から二〇一一（平成二十三）年まで十四年連続して自殺者が三万人を超えている。つまり今の日本では一日に約九十人が自殺で亡くなっている。また、自殺未遂者はだいたい自殺既遂者の十倍はいると推測されているため、この日本では毎日約九百人もの人々が自殺を凶っていることになる。

それに関連して、近年では学校でのいじめ問題や体罰問題による自殺、高齢者の孤独を苦しめた自殺をジャーナリズムはセンサーショナルに取り上げ、世間はそれらの問題に沸き立っている。しかし、これらの問題を感情論や善悪の問題で論議したり、組織や政府のあり方に怒りの矛先を向けそれらを是正するだけでは、一時的な抑止効果は出たとしても、自死問題に対する抜本的な解決にはならない。もっと、人々を自死へ追い込むような現代日本社会の構造、あるいは環境を見直す必要がある。

そこで私は、現代日本が抱える自死問題について論じるために、自死をその傾向上二つに分類した。一つ

目は《積極的自死》、二つ目は《消極的自死》である。そしてまた《消極的自死》の方は更にその性格を考慮し、逃避的性格の《消極的自死》と他殺的性格の《消極的自死》の二つに細分化した。

拙論ではこの二つの傾向の自死を浄土真宗の祖、親鸞聖人（以下親鸞）の思想に基づいて考察することにより、現代日本の抱える自死問題の解決策を示してゆきたい。

## 第一章 現代日本が抱える自死問題の実態

### 第一節 《積極的自死》について

序論で述べたように、私は自死を三つのタイプに分類した。この第一章第一節ではその一つ、《積極的自死》について扱う。《積極的自死》とは、人生や現世を否定、または無味乾燥なものとして捉える厭世主義・ニヒリズムに起因した自死、または人生を謳歌したからこそ自分の人生に見切りをつけるために決行する自死のように、自殺企図者（自殺をしようという考えを持った人）が自殺という行為によって自らの生を絶つことに対し肯定的、且つ自発的に遂行するものと、本論文では定義した。以下からこの節では《積極的自死》について述べていく。『自殺者数資料』（資料1）の「原因・動機別自殺者数」のグラフを見る限り、自殺の原因・動機のトップは「健康問題」で、そのあとに「経済・生活問題、家庭問題」と続くが、これら自殺の原

因・動機の上位に挙がっているタイプの自殺は、何らかの存在・状況に苦しめられた結果、やむを得ず自殺したのだと考えられる。つまり、自らの意思で選択的に自死を遂げる自死Ⅱ《積極的自死》の件数は現代日本では少ないと資料から読み取ることが出来る。しかし、現代日本が抱える自死問題、そして自殺観を探るための比較対象として、この節では《積極的自死》について掘り下げてみていこうと考えている。

日本人は自殺という行為に対し、多くの場合マイナスのイメージを抱いているであろうと思われる。しかし、私はこの《積極的自死》については多くの日本人がプラスのイメージを抱いているのではないかと考えている。その例が切腹や自決である。それは赤穂浪士や神風特攻隊のような主君や国への忠義を真つ当するための切腹・自決のような、自己犠牲に「潔さ」という一種の美意識を見い出すという土壌が日本には存在しているためだと思われる。（ただし切腹・自決には自らの意思が伴わない、その集団・組織における無言の圧力に屈したものであるとの意見も多々あるが、本論文の論点はそこではないので、子細は追求しないこととする。）そして、この日本特有の自殺の美化について、イリノイ大学シカゴ校精神科の精神科医佐々木信幸氏は次のように述べている。

世界中のほとんどの人達は「自殺はしてはいけないものだ」という共通認識を持っています。それに対して、日本には「自殺はしてはいけないものだ」ということが常識になっていません。それどころか、日本人には「切腹」の思想が脳裏に刻まれていて、「責任をとって自殺することは良いこと」という考えすらあります。

(1)

そして、日本という国にこの独特の風土が培われた理由について、ヨーク大学名誉教授の布施豊正氏は著書『死

にたくなる人の深層心理』の中で次のように記している。

狭い国土に過剰な人口、そのうえ資源の乏しい日本では、集団の調和・安全、そして存続が優先し、強い自己主張や個人主義は認められにくいばかりではなく、個人主義(individualism)は自己中心主義＝利己主義として敬遠されがちである。このように集団主義の発達した日本では個人の幸福は集団があつてはじめて可能、という思考が優先する。集団の外圧のために自己を犠牲にする傾向はこのような文化的背景と土壌のうえに育つてゆき、往々にして集団のために自己を犠牲にする自殺が目立つようになる。(2)

つまり、以上の二つの意見を統括すると、集団主義思想が主流となっている日本では、所屬している集団の調和・安全・存続が最優先されるものであり、それらのために自己を犠牲にすること厭わない、また同時に、そのような精神性を美德とする風潮があると言える、ということである。このような自己犠牲の精神による《積極的自死》は、西洋の《積極的自死》(自殺を自由意思による身体への支配として賞賛していたストア主義思想的なもの)とは一線を画する。しかしながら西洋思想が流入した後の日本では、自殺は自由意思による権利の一つだという主張が浸透している。また、芸術家や作家、哲学者などのインテリゲンチヤが自死を遂げたケースが誇張された結果、厭世自殺に代表される《積極的自死》に対し、どこかほの暗い知的さを感じる風潮も見受けられる。以上のことからこの節を簡潔にまとめると、現代日本では《積極的自死》と推測される自死の件数は少ないが、それに対しマイナスのイメージを強く抱いていない、むしろ美德を感じたり、プラスの価値を見出し出しているという文化的背景がある、ということである。これを念頭に置いて、以下から《消極的自死》について考察する。

## 第二節 逃避的性格の《消極的自死》について

この第二節、また続く第三節では《積極的自死》の対を成す《消極的自死》について述べる。また序論で述べたように、この《消極的自死》は更にその性格上、逃避的性格の《消極的自死》と他殺的性格の《消極的自死》の二つに分けて考えた。この節ではまず前者の逃避的性格の《消極的自死》について考察していく。

まず初めに、この逃避的性格の《消極的自死》は病氣・怪我等による肉体・精神的苦痛から解放されるために決行する自死、と私は定義した。なぜ病氣・怪我という自殺原因をわざわざ一つの大きな括りとして取り扱うかという点、先にも挙げた『自殺者数資料』（資料1）の「原因・動機別自殺者数」で健康問題を起因とした自死は続く二位の経済・生活問題の二倍以上の差を付けての、圧倒的な一位であるからである。ただし、単に件数が多いから一つの括りにしたわけではなく、この病苦による自死というのは現代日本が抱える自死問題の大きなネックなのである。それを示すのが以下に挙げる京都大学名誉教授で応用倫理学の第一人者である加藤尚武氏の文章である。

死の文化の古典的原則は、こうだった。「運命によって避けがたく死ぬことには、諦念を持つべきだ。人為によって死を招くことは絶対に許されない。」ところが、われわれの向かっている死の文化では、「運命によって避けがたく死ぬことは極めてまれな例外である。人為によって死を招くことによってしか、安らかな死は得られない」という原則が支配しているように思われる。(3)



加藤氏の、この端的ながらも的を得た言葉が言い表すように、医療の発達が今までは完治不可能と思われていた病すら治せるようになり、人類の更なる延命を可能にすることとなったが、それゆえにもう十分に生きたと自分では満足しているのに、延命措置によって死にたくても死ねない、という状況が出来上がった。また、治療のために長期的にかさむ費用が患者の身内を経済的に圧迫し、それによって「身内に迷惑をかけている」という罪悪感を患者に与え、その結果自ら死を選んでしまうケースもある。それを裏付けるように、慢性腎不全の人工透析を受けている患者や頭頸部癌、HIV陽性などの長期にわたる療養生活が必要な病気にかかった患者の自殺率は非常に高い。(4)

更に専門家による調査チームが自殺既遂者遺族に聞き取り調査を行って自殺死亡者の自殺原因について調べた調査結果(資料2)によると、既遂自殺者の中で精神障害の診断に該当しない人は約一割程度で、自殺者の九割近くが何らかの精神疾患にかかっているという結果が出ている。このような事実から、病気による身体疾患だけでなく、精神面の健康についても考慮しなければいけないということがはっきりと分かる。

以上のことから、この逃避的性格の《消極的自死》は、病、という苦の原因を解消することが出来れば、自殺企図者から自殺念慮が消える可能性が大きいという点で、自殺という行為そのものに対し積極性がなく、むしろ苦痛から逃れるための、手段、として自殺を選択していると考えられる。そういった点で《積極的自死》とは異質の自死である。つまり、このタイプの自死問題解決の手っ取り早い方法は苦の原因である病の完治であるため、必然的に医療の力が重要となってくる。しかし、医療は万能ではなく、絶対に助かるという保証もない。そして、

過度の延命が逆に精神的に患者を苦しめ、それにより自殺を誘発してしまう可能性もある。それゆえに医療従事者と周りの人々は患者の身体疾患の治療だけでなく、精神の健康（メンタルヘルス）にも十分に気をつける必要があると考える。

### 第三節 他殺的性格の《消極的自死》について

第二節で述べた逃避的性格の《消極的自死》の他方、他殺的性格の《消極的自死》は周囲の環境に追い込まれ、苦しい現状から逃れるための最終手段としてやむなく行った自死のような、外的要因により誘発された自死と定義することにする。

こちらのタイプの自死は、死因はあくまで「自殺」扱いだが、他人や周囲に追い詰められた結果、やむを得ず死を選んだと言うところから、限りなく「他殺」に近い。現代日本におけるこのタイプの自死は大きく分けて三つのタイプのもが目立つ。それは若年層に多いいじめ自殺、中高年層に多い経済苦・社会の圧力による自殺、高齢者の孤独を苦とした自殺である。これらは現代日本社会における自死問題の核であり、この三つのタイプの自死問題解決こそが最も重要であると私は考えている。

以下、この節ではこの三タイプに焦点を当てて考察していく。まず初めにいじめ自殺についてであるが、これはいじめという行為によって加害者が被害者を肉体的・精神的に攻撃しており、この行為の結果それを苦として自ら死ぬことを選んだのだとしたら、それは加害者が自殺既遂者を殺したといって過言ではない。

続いて経済苦・社会の圧力による自殺だが、このタイプの具体例を挙げるとすれば過労やリストラによる精神的苦痛、またそれによる経済苦などが挙げられる。資本主義社会の日本では労働をし、賃金を得、それにより生活してゆくわけだが、この構造上どうしても労働者は会社に対し弱い立場に置かれがちである。そんな構造上の原因もあって過度の労働を強いられ、その結果それを苦に自殺する自死は、会社（または組していた組織）に殺されたと同等である。また、リストラによる経済苦を原因とした自殺は、まだまだ日本社会にきめ細かい福祉が行き届いていないこと、そして何より無職者に対する世間の偏見の目が、この手の中高年自殺に拍車をかけている。

そして最後に高齢者の自死であるが、高齢者の自死というと、どうしても独り暮らしの高齢者が寂しさ・侘しさに耐えられず自殺してしまうというものを想像しがちだが、実際はそうではない。それを証明するのが元東京都監察医務院長で医学博士の上野正彦氏が行った調査の結果である。氏の著書、『自殺の9割は他殺である』に書かれている調査結果についての部分を以下に抜粋する。

独り暮らしの老人と、家族と同居している老人を比べると、家族と同居している老人のほうが自殺率が高かった。普通は家族と同居している老人は幸せで、独り暮らしの老人のほうがわびしい生活を余儀なくされ、自殺しやすいと思いがちだが、調査結果は全く逆だった。

この調査についてももう少し詳しく紹介すると、当時はこれを、三世代同居、夫婦のふたり暮らし、子どもとふたり暮らし、独り暮らしに分類して集計。結果、三世代同居の自殺が30パーセント強で

トップで、以下、独り暮らし、夫婦ふたり暮らし、子どもとふたり暮らしの順であった。(5)

この調査結果と併せて、氏は同書の中で高齢者自殺の一番の要因は、体力も収入もない老人が家族の中で厄介者とされ、冷遇されていることによる疎外感であると述べている。孤独というと一人きりの状態であるというイメージがあるが、この調査結果は人に囲まれているからこそ孤独を感じるのだという、孤独の本質を浮き彫りにしているように思える。そして、またこの結果から、高齢者の自殺も周りの人々が意識的無意識的にせよ、精神的に追い詰めた結果であると言えるので、これも間接的な他殺であると言えるとは私は考える。

そしてこの他殺的性格の《消極的自死》を遂げた人々に対して、心の弱い人、というレッテルが貼られることがある。しかし、この考えは間違いだ。それは今まで述べてきたように外部から肉体的、精神的に追い詰められれば、どんな人間でもストレスを感じるものであるし、それが当人の耐えられない容量に達してしまった場合、人生に絶望し死を選ぶ可能性は誰にだって十分に有り得るのである。だが日本ではどうしても「自殺は個人的なこと」であり、「本人の意思による行為」という見方が強いように思う。しかしながら、上記で例として挙げた三つのタイプの他殺的性格の自死のように、自ら積極的に選んだわけではない、換言するならば自発性のない自殺こそが、現代日本の自殺の大部分を占めているのだ。それにも関わらず、「自殺を本人の意思による行為」と冷淡に片付けてしまうのは、日本人が自死問題を正しく把握していないという現状が感じ取れる。そしてこの自殺に対する偏見こそが、自殺企図者を「自殺念慮を抱く自分は弱いのである」という風に精神的に追い詰め、残された遺族を「苦しんでいるのに力になれなかった」という無

力感や罪悪感を抱かせる。このように現代日本に蔓延っている自殺に対するマイナスイメージは自殺企図者を更に苦しめ、二時災害的にその遺族を苦しめ続けるのである。

## 第二章 浄土真宗における自死の捉え方

### 第一節 『西方指南抄』から見る《積極的自死》の受け止め方

第一章では現代日本における自死問題の傾向を考察してきたが、この章ではそれを元に、親鸞ならばこれら三タイプの自死に対してどういった考えを持つか、ということを推論していく。

まず初めに、この節では第一章第一節で扱った《積極的自死》について論じる。ここで注目したいのが、親鸞が師である法然の法語・伝記・書簡などを編集した『西方指南抄』の終わりの方に載せた、「つのと三郎殿御返事」という書簡に添えた一文である。

つのと三郎といふは、武蔵国の住人也。おほご・しのや・つのと、この三人は、聖人根本の弟子なり。つのととは生年八十一にて、自害してめでたく往生をとげたりけり。故聖人往生のとしとて、死にたりける。もし正月二十五日などにてやありけむ。こまかにたづね記すべし。(6)

津戸三郎は法然の弟子の一人で、「聖人根本の弟子」と称されるほど、大変深く法然に帰依していた。その津戸三郎は法然を慕うあまり法然が亡くなった年齢である八十一歳の時に自害したのだが、上記に挙げた一文から

分かるように、親鸞は津戸三郎の自害を責めていない。むしろ「めでたし・立派だ・見事だ」とその逝き方を誉めている。これについて龍谷大学法学部教授の鍋島直樹氏は次のように述べている。

ここに親鸞聖人が、津戸三郎の自害を責めずに、立派な浄土往生であると受け止めていることがうかがわれます。親鸞聖人は法然聖人を心から尊敬していました。「よきひと(法然)の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」(『歎異抄』『註釈版聖典』八三二頁)と記されているほどです。法然聖人を心から信じていた親鸞聖人にとって、師の法然聖人を慕って自害を選んだ津戸三郎の心情はよくわかるものだったのではないでしょうか(7)

鍋島氏が書かれているように、親鸞には津戸三郎の法然を慕う気持ちが十分に汲み取ることが出来たのだろう。ただし、ここには前提として『親鸞聖人御消息』第十六通に書かれている、以下の考えがある。

まづ善信(親鸞)が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定のひとは、疑なければ正定聚に住することに候ふなり。さればこそ愚痴無智の人も、をはりもめでたく候へ。如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとに申され候ひける、すこしもたがはず候ふなり。としごろ、おのおのに申し候ひしこと、たがはずこそ候へ。かまへて学生沙汰せさせたまひ候はで、往生をとげさせたまひ候ふべし。(8)

つまり、臨終の善悪に死に方の善し悪しに関係なく、信心を得た人は、どんな愚かで無知な人であっても浄土に往生することが出来るのだ、と言う意味である。この文章と先の津戸三郎の自死を述べた文章を併せて考えるに、既に津戸三郎は信心を獲得しているので、その死に方がどんなものであっても必ず浄土に往生できるのだ

から、それは立派なことである、と親鸞は捉えたのだと思われる。

また、この御消息に表されている臨終観は、師である法然の考えを踏襲したものであり、それが伺えるものとして、法然の書いた次の二つの文が挙げられる。

□より念仏を信せん人は、臨終の沙汰をは□<sup>あ</sup>な<sup>も</sup>ち<sup>と</sup>にすへき様もなき事なり。仏の来迎一定ならば、臨終の正念は、また一定とこそおもふべきことほりなれ。(9)

臨終に、善知識にあひ候はずとも、日ころの念仏にて往生はし候へきか。答。善知識にあはずとも、臨終おも様にならずとも、念仏さは往生すへし。(10)

ここでは、常日頃から念仏を唱和している者は死に方の善し悪し、また善知識に出遇っていなかったとしても必ず阿弥陀仏の本願力によって往生することが可能ということを読んでいる。この師の考えを受けて親鸞は自らも同じく、死に方の善し悪しを問わず、ただただ阿弥陀仏の本願のはたらきによって往生できることを喜ばしいことと感じたのであろうと思われる。

また、この津戸三郎の自死において重要なのは、津戸三郎の自死は残された周りの人々に悲しみは与えていたとしても、「マイナスの影響は与えていない」と言うことである。これについては第三章で詳しく述べる。

## 第二節 煩惱具足と逃避的性格の《消極的自死》

続いてこの章では一章二節で扱った、逃避的性格の《消極的自死》を親鸞的解釈から見てゆく。この逃避的性

格の《消極的自死》を考へる際に触れておきたい教えが以下の一節である。

断と言ふは、往相の一心を發起するが故に、生としてまさに生を受くべきなし、趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す、かるがゆへに即頓に三有の生死を断絶す。かるがゆへに断と曰ふなり。四流とは即ち四暴流なり、また生・老・病・死なり。(11)

ここで親鸞は信心を得ること六道や四生と言つた迷いの世界は虚妄だということを知り、生死流轉の理と煩惱を離れ、浄土に往生することが出来るということを明らかにしている。そして、この一節の中で注目したいところは、煩惱の異名である四暴流（欲暴流・有暴流・見暴流・無明暴流）と生老病死をイコールの関係で結んでいることである。つまり、親鸞は生老病死も煩惱が起因するものであると捉えていることがうかがえる。そこで逃避的性格の《消極的自死》をこの教えを基に鑑みると、逃避的性格の《消極的自死》の根本原因は病苦であると定義したが、この病苦から逃れたいと思う心は我々凡夫にとっては不可避な存在である、煩惱にあたる、ということになるのである。そして、病苦から逃れたいと思う気持ち（煩惱）と、死に安寧を求める気持ち（煩惱）が同時に心の中に芽生えようと、人は自ら死を、つまり逃避的性格の《消極的自死》を選んでしまうのである。この一節の他にも、『歎異抄』には病氣を患うことで気が弱ってしまうことも、また煩惱のせいであるという旨の一文が記されている。それが左に挙げた『歎異抄』第九条の中の一文である。

また浄土へいそぎまゐりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんところばそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠よりいまままで流轉せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生まれ



ざる安養浄土はこひしからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。(12)

ここでは、少しでも病気にかかると死を恐れ、心細く感じてしまうことも我々に煩惱があるがためであるとし、続けて、たとえ苦悩に満ちた現世であってもそこを離れることが出来ず、現世に執着し、安らかなさとの世界に往こうという気持ちが生えてこない原因も、我々に煩惱が盛んであるからである、と説いている。(13)

これら二つの教えから、親鸞にとって死を前にして心が弱くなることは煩惱のせいであり、それは私たちが現世にいる限り仕方の無いことであると捉えていると思われる。それゆえに、ここから転じて、死を覚悟するような病気を前にして、それを苦に自殺することは煩惱から生じた仕方の無い心の働きであり、それによって自ら死を選んだとしても、そのことを親鸞は咎めないのではないかと私は考察する。

### 第三節 業縁と他殺的性格の《消極的自死》

主に若年層で目立ついじめ問題や中高年層での経済苦・職場問題、高齢者の孤独・疎外感など、外部からもたらされる苦に対しどう対処してゆけば良いのか。この節では前章三節で扱った他殺的性格の《消極的自死》について浄土真宗の視点から考えることとする。『歎異抄』第十三条にはこのように書かれている。

よきこころのおこるのも、宿善のもよほすゆゑなり。悪事のおもはれせらるも、悪業のはからふゆゑなり。

故聖人（親鸞）の仰せには、「卯毛・羊毛のさきにゐるちりばかりもつくる罪の、宿業にあらざといふことなしとしるべし」と候ひき。(14)

「さるべき業縁のもよおさば、いかなるふるまいもすべし」（中略）されば善しきことも悪しきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまゐらすればこそ、他力にては候へ。（15）

前者では「善い心がおこるのも、過去の世の善い行いがそうさせるからです。悪いことを考え、それをしてしまうののも、過去の世の悪い行いがはたらきかけるからです。」と書かれており、続けて亡くなった親鸞が「うさぎや羊の毛の先についた塵ほどの小さな罪であっても、過去の世における行いによらないものはないと知るべきである」（16）と述べたことが書かれている。また後者の一節では、「人はだれでも、しかるべき縁がはたらけば、どのような行いもするものである」、そして「善い行いも悪い行いもすべて過去の世からの縁にまかせ、ただ本願のはたらきに身をゆだねるからこそ、他力なのであります」という教えが書かれている。（17）完全な善人、完全な悪人などおらず、人は時に自分でも思いも寄らぬような悪しき行為を行ってしまう。そういった意味で人の人生というものは善と悪の綴れ織りである。親鸞はこの事実を認め、その上でただただ弥陀の本願力に身を任せることが他力であると語り、それを推奨している。ここにおける親鸞の考え方に他殺的性格の《消極的自死》の解決策が見出せる様に思う。田代俊孝氏は著書『親鸞の生と死 デス・エデュケーションの立場から』の中で次のように記している。

過去、宿世を背負い、同時に未来永劫の出離の縁なき身という未来永劫を背負っている。自身の過去、未来の歴史性そのものが、「現に」という深さとして信知されている。つまり、過去、未来の暗さも今、現在の問題となっている。（18）

つまりこれを応用すると、自分に苦悩を与えている外的要因（人や社会）は自分に害を加えようとして悪い行いをしようとしているのではなく、すべては過去からの縁によるものであり、それらは自らの力が及ばないところに原因があるという見方が出来る。且つ、自らがこのような状況に陥っているのもまた、縁の力の作用（『歎異抄』では宿業と表されている）であるともとれる。しかし、そうなると縁の未来永劫性、つまり田代氏の言葉を借りて表現するならば、今、この私に、過去、未来の暗さ、を与える縁の作用を不条理だと恨みたくなるものである。例え過去からの縁のはたらきによって苦悩がもたらされているとしても、今を生きる自分には関係が無いように思えるからである。

しかし私は、親鸞はこの「業縁」（または宿業）と言う言葉を用いることで我々に説きたかったこと、その要はもっと深いところにあるように思える。それは、全ての出来事は我々には計り知れないということである。親鸞はその道理を説かんが為に「業縁」という、不可知で、我々が慮ったところでどうしようもない概念を打ち立てたのではなからうか。これに関連して、龍谷大学文学部教授の藤能成氏は我々現代人の認識方法、つまり知的・観念的考えで全てを理解しようとする方法を「無明」と表現している。無明とは仏教用語であるが、氏の説明によると「無明は無智とも言い、智慧がないことを意味する。智慧とは慧ともいい、ものごとをありのままに知る力、あるいは働きであり、ものの姿を照らし、明らかにする光に譬えて、智慧がないことを、明かりがないと言う意味で「無明」と呼ぶ。」（19）と述べている。そして、併せて氏はこの「無明」こそが現代人の苦の根本原因としている。つまり、「業縁」という我々にはどうしようもない概念を提示することで、あれやこれやと

全てのものごとに善悪や価値を下す傲慢さ（親鸞はこれを「はからい」と記している）を戒め、全てをあるがままに受け入れることを説いているのではないかと考える。このはからいを離れ、すべてのものごとをありのままに受け入れる姿勢こそ、親鸞が晩年にたどり着いた境地、「自然法爾」である。しかしながら、全ての人が皆、親鸞のように凌雲の志抱けるわけではない。ゆえに、我々は自らがはからいをもっていることを自覚し、自らが置かれている状況を諦念をもって、正しく受け入れるべきなのではないだろうかと考える。これをもう少し現代人に馴染みやすいように換言するならば、「ものごとは全て確固とした事実ではなく、解釈に過ぎない」と捉え、自らの見方にのみ固執するのではなく、それといったん距離を置き、広い視野をもって状況を受け入れる努力をするということである。

このような見地から考えると、他殺的性格の《消極的自死》は加害者、被害者ともに縁の働きがもたらしたままならない結果なのである。しかし、このように感情を脇に置いたまま論を進めるのは少々片手落ちのように感じる。そこで一つ加えるならば、もし苦境に陥ったときは苦悩を与えられたことを不条理だと嘆くのではなく、この苦悩は自分に与えられた成長のための「チャンス」である、として見方を変え、受け止めるべきではないかと考える。このようなプラスの考えの基、その状況をありのまま見つめる努力をすることで、マイナスの感情に埋もれたままでは決して見えない、可能性が生まれるのではないかと考える。竹が節を作って成長していくように、人も苦悩に向かい合うことで次の成長に繋がる節を作るのではないだろうか。

### 第三章 親鸞思想による自死問題へのアプローチ

#### 第一節 自死が与える影響とその受容

この節では自死によって残された自死遺族や周りの人間が受ける影響と、それらと如何に向き合っていたら良いのかについて述べる。まずは自死のもたらす影響についてだが、一章一節において紹介した佐々木信幸氏によると一人が自殺することで、精神的に深刻な影響を受ける人が、最低でも五人はいるとのことである。また、実際に残された人が鬱状態になって後追い自殺をしたり、PTSD（心的外傷後ストレス傷害）になるケースもある。そして子どもに自殺された親の七十パーセントが離婚している、といった調査結果や、家族の自殺を経験した人は、そうでない人に比べて自殺率が三倍も高くなっているというデータがあると述べている。それを踏まえて氏は自殺について以下の自論を展開している。

「自殺」というのは、自分が死ぬだけでなく、自分の大切な家族を長期に渡って不幸にし、場合によっては家族にも「自殺」を引きおこすのです。つまり、自殺とは自分を殺す行為ではなく、「家族を殺す行為」であると認識しなくてはいけません。自殺を考える当事者は、よく「このままでは家族に迷惑をかけるので自殺します」といいますが、自殺するのが一番の迷惑なのです。自殺とは、「殺人」であり「傷害」なのです。

(20)

このように、少し厳しい論調であるが自殺が周りの人間に与える精神的ダメージを考えた場合、それを「傷害」

と言う言葉で表すのは強ち間違ひではないと私は考える。つまり、自殺という行為は自分自身だけに収まらず、周囲の人々の今後の人生に多大な影響を与えるものなのである。そういう意味で自殺は他の人間の心、そして今後の人生を傷つける、「傷害」であると言えるのである。

「傷害」という強い言葉を使ったことで、どうしても自殺を非難している印象をもたれるかもしれないが、私は「自殺をする権利」自体は否定しない。何故ならば、「権利」とは「欲を誰にでも認めようという建前」だと考えているからである。（例えば生存権は生に執着することであるし、財産権は私財に執着することである。）つまり権利を否定することは欲を否定することになる。親鸞は自らも含めた我々は衆生を「煩惱具足の凡夫」と言っているように、我々衆生は欲（＝煩惱）から離れることが出来ない存在である。それゆえ、この親鸞の考えに則った上で私は自殺をするという権利を否定することはしない。しかし、自殺をすることで周囲の人々の心、また彼らの今後の人生に傷を付けることはあつてはならないと考える。私がそのように考えるのは『歎異抄』第一三条内における以下の一節に依る。

御消息に、「薬あればとて、毒をこのむべからず」と、あそばされて候ふは、かの邪執をやめんがためなり。まつたく、悪は往生のさはりたるべしとにはあらず。持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかでか生死をはなるべきやと。かかるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられ候へ。さればとて、身にそなへざらん悪業は、よもつくられ候はじものを。（21）

ここでは親鸞が手紙に「いくら薬があるからといって、好きこのんで毒を飲むものではない」としたため、悪

を犯すことは決して往生の妨げにはならないものの、わざわざ自分で悪業と理解していることに手を下す必要はない、という趣旨の内容が書かれている。つまり先程のこととリンクさせると、我々は煩惱具足の愚かなる身ではあるものの、自らが悪と信知している行為、つまり周囲の人々の心、将来を傷つけることはわざわざ行つてはいけないのだと考えるのではないかと思われる。

これを踏まえた上で、第二章第一節で扱った津戸三郎の自死に立ち返ってほしい。津戸三郎は敬愛する師法然が亡くなった齢と同じ齢に死にたいと考え自殺したわけだが、この自死は敬愛 $\parallel$ 欲を起因とし、周囲の人々を悲しませるものの、これまでこの節で扱ってきた、残された者にマイナスの影響を与える「傷害」的な自殺とは異なっている。このことから親鸞は臨終の善し悪しは問わないとしつつもわざわざ津戸三郎の死を「めでたい」と言い、誉めているのは他人にマイナスの影響を与えないまま往生を遂げたことと関係しているように思う。蓋し、この死が周りの人にマイナスの影響を与えるものであったなら、その死を咎めはしないものの、「めでたい」と誉めることはなかったのではないかと私は推察している。

## 第二節 慈悲の心と繋がり回復

前節では自死が周囲の人々に与える影響について考察してきたが、ではもし自分の身近に自殺を考えている人がいたとしたら、自分は行動どうしたらよいのかについてこの節では考えてゆく。まず、大前提として、自殺予防のためには、医師やカウンセリングスタッフの専門的な知識はもちろん、身近にいる親しい人間の力がとても

重要になってくる。それは、自殺企図者というのは視野が狭まり、自分中心かつ悲観的な考えになっており、健全な人には刺激にならぬ言葉でも、自殺企図者にとっては心を深く抉られてしまうからである。つまり、身近に居る人々がかける言葉が自殺企図者には思いもよらぬ殺傷能力をもった言葉と取られてしまう危険性があるのだ。『歎異抄』第四条の中にもそのことを示すような次の一節がある。

今生にいかにとほしと不便におもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。(22)

これは「この世に生きている間は、どれ程かわいそうだ、気の毒だと思っても思いのままに救うことは出来ないのだから、このような慈悲心は完全なものではありません。」(23)という意味である。この一節について田代俊孝氏は同書において以下の考えを述べている。

ものをあわれみ、かなしみ、はぐくみ、思うがごとくたすけとぐることができるであろうか。あるいは、父母孝養のために念仏を回向して、それらをたすけとぐることができるであろうか。われわれは、それらの徳目を忠実に実践しようとすればするほど、逆に“及び難い自己”を発見せざるをえない。(24)

つまり、どんなに我々が相手を励まそうとしても、その心に抱えている全てのものを推し量ることは出来ない。そのため、完全に相手を救い、苦悩を取り除いてあげることが出来ない。ややもすると逆に相手を追い詰めたり、また自身の無力さを痛感し、かえって傷ついてしまったりしてしまうこともある。もちろん、だからといって何もしないことが良いわけではない。我々衆生は、結局のところ他人を救おうとしても、それには限界があるのだ。このどうしようもない事実を受け入れた上で、他人が苦境に陥っているとき、ほんの少しでもその人が前向きに



生きていけるような手助けは出来るのではないだろうか。

またこの病苦を起因とした自殺についてショウペンハウエル (schopenhauer, A.) は著書『自殺論』で老・病・死の視点から自殺は「誰にしても自分自身の身体と生命に関してほど争う余地のない権利」として自殺をする権利を容認しつつも、抑制策として「ミッドライデン (重荷の共有)」について述べている。(25) ショウペンハウエルは老・病・死の問題や、それから生ずる苦悩Ⅱ「命の重み」は一人で抱え込むのではなく、共有する必要があるとしている。また、ショウペンハウエルが重荷と称したものは、奇しくも第二章第二節で紹介した『信巻』の一節で親鸞が煩惱であると定義したものと同じであるということにも注目したい。つまり、浄土真宗においてのみならず、生老病死は人間が人生を歩む上で必ず降り注ぐ苦痛なのである。そして、そこから私は、この「ミッドライデン (重荷の共有)」を行うことが自殺抑止に繋がると考える。自らの周りに居る人々だけでなく、自然や宇宙、それら広大なものと自らの繋がりを感じ、それに生かされていること実感することで生きる上で誰しも大なり小なり背負う重荷を軽減できるのではないだろうか。そしてこの考えを補強するのが、先程も紹介した藤能成氏の意見である。

現代人の認識方法の転換、すなはち無明を超えるために必要なのが「繋がりの回復」である。「繋がりの回復」とは、「自身と他者・社会・自然・宇宙との繋がりの感覚を回復すること」であり、繋がりの感覚の回復自体が、無明を超え、智慧を疎くしていくことを意味しており、智慧の獲得によって苦悩の解決へと道をつけることができるのである。(26)

ここで氏が提示している「繋がりへの回復」とはこの節で述べてきた「ミッドライデン（重荷の共有）」と同じ性格のものであると考えられる。

また、氏は末尾に記した註において「繋がりへの回復」の繋がりを絆と言う言葉と使い分けるに至った理由について、絆の表す人と人の関係だけでなく、人と社会、人と自然、人と宇宙の相互関係も想定するためであると述べている。「ミッドライデン（重荷の共有）」には人と人以外の関係が想定されていないと考えられるので、人と人の関係だけではない、もっと広い関係性を含んだ「繋がりへの回復」を主軸として行いつつも、人と人どうしにおいては重荷を共有しようと心掛けることが、自殺問題抑止には重要なのではないかと考える。

### 第三節 ライフマネジメントの実践

第三章の第一節、第二節を踏まえ、私は自殺抑止の方法として、ライフ・マネジメント<sup>6</sup>の実践を提唱してみたいと思う。これは近年よく耳にするようになったグリーンフ・ケアのような事後介入（ポストベンション）やカウンセリングや治療のような危機介入（インターベンション）ではなく、全ての人を対象にした事前予防（プリベンション）である。ちなみにライフマネジメントという言葉は世間一般では主により良い資産運用を行うためのものとして使われているが、本論で使用するライフマネジメントという語の、ライフ<sup>7</sup>は、人生、且つ、命<sup>8</sup>を指す。これは、アンガー・マネジメント<sup>9</sup>（何かに憤りを感じた時、そこで怒りを露わにすることで自らのストレスが発散されることと、それにより周囲からの印象が悪くなることを比較すること）と同じ要領で「自死に

よる苦痛からの解放」と「蓄積してきた経験や人との繋がり」「周りの人々に与える影響」を比較し、どちらが上回るかを熟考すること、とする。このライフ・マネジメントの具体的な方法と効用についてももう少し詳しく述べておく。自殺企図者はそれぞれ何らかの個人的理由で自死を考えるのであるが、それらから解放されることにより自己に生じる利益を仮にAとする。それに対し今自分が持っている蓄積してきた経験や人との繋がりを失うことをBとする。そしてまたそれらの人々が自分が自死することによって精神的に受けるであろう精神的ダメージをB②とする。私の結論としては、AとB（+B②）を足し引きしたとき、AがB（+B②）を上回ることにはまず有り得ないと考えている。何故ならば、自殺願望は一過性のものであることが多く、自殺企図者にとって解決不能に思える苦悩の根本である問題も、今後の生き方次第でいくらでも挽回可能だからである。それに対し、自殺という行為は絶対還元不可能である。自分自身の全ての可能性を断ち切り、周りの人々の心に傷を与える行為なのである。これに関連した仏教的立場からの意見として、佐藤雅彦氏の論文「倫理規範としての仏教の役割―安楽死・自殺ほう助と不殺生戒」の中で紹介されている中野東禅氏の意見を引用したい。

仏教的態度とは、自我の為でなく、後悔を残さず、愚かさを自分にも回りの関係者にも連鎖（輪廻）させないで、そのためには十分な社会社会的信頼を形成して、運命を十分忍耐し、智慧により、自己の責任（因果）で、その結果は自分で背負い、（地獄に行く覚悟で）仏の命を実現させる為に（感謝を持って）、この矛盾を背負っていく主体性においてのみ黙認されるということを述べ、仏教の説くところの生き方とは、自分の生命に責任をもちながら、生かされている命であるということを自覚し、充実した時を過ごし、後悔のない

ように限りある「生」を全うするということであり、人間関係において良い信頼関係を築き、周囲に良い影響を与えられる「死」を迎えられるよう努力していくことだと説かれている。(27)

これは仏教の立場から自殺について述べた意見であるが、この意見から伺える理想的な行き方は、自殺のように周りの人々の心を傷つけ、それによって生じる負の影響を連鎖させてしまうのではなく、自分が築き上げてきた人との関わりを大切にし、また、それらの人々のお陰で生かされていることに感謝しつつ、良い人間関係を構築し、それらの人々に良い影響を与えられるような形であるとしている。

このように残された者達にマイナスの影響を与えるのではなく、良い影響を残してこの世を去る様心がける、この考えが私の推奨するライフ・マネジメントの根幹にある考えである。

そして次にこのライフ・マネジメントの意義について述べたい。ここまで私はライフ・マネジメントの実践方法とその効用を述べてきたわけだが、その実、ライフ・マネジメントの実践そのものに主眼を置いているのではない。ライフ・マネジメントの実践において本当に重要なことは、実際にどちらが上回るか、ではなく、自らの苦悩に捕らわれ、いっばいっばいになっている自分の現状を自覚し、周りの者に目を向けるという余裕を持つこと、といういわば視野の拡張にある。自殺企図者は物事を判断する際の視野が狭まり、自分中心思考になりがちなるという結果が多く、学者、医師によって発表されている。それゆえ、ライフ・マネジメントを普段から習慣づけ、常に周りの人々に与える影響を考えることを無意識のレベルで可能にしておくことにより、自殺を抑止したいと私は考えている。

他にも自殺抑止の方法として、自死を遂げるためには想像以上の肉体的苦痛を感じることに、またうまく死ぬことが出来ず身体に障害を負い、一生それを背負って生きることとなってしまった悲惨なケースなどの自殺行為のマイナス要因を訴える手もあるが、肉体的苦痛というのは限りなく自己の問題であるので、当人に強い自殺念慮があつた際には抑止力としては十分に機能しないように思われる。また、一章一節において述べたように日本は集団主義が根付いているので、「周りの人々を省みる」といったニュアンスは、人々の中に築かれた良心に強く働きかける。つまり、ライフ・マネジメントは日本の風土に馴染んだ考えを醸成する形で行う抑止策なのである。それゆえ自殺の抑止策として私はライフ・マネジメントの実践を推奨するのである。

## 結論

本論文においては親鸞の考えを中心に自殺問題を扱う何名かの先生方、また先哲の考えを参考に自死、またその抑止策について論じてきた。しかしながら、自殺は内在する多くの複雑な原因によって引き起こされるため、自殺問題について統合的に解決しうる方法というものは存在しない。また、本論では自死を三つのパターンに分けて論じてきたが、必ずしもきれいにそのパターンに当てはめるのは難しい。何故ならば、人間は一人一人、置かれている状況や感受性がさまざまなために、他人の心を完全に付度するということは不可能なことだからである。

しかしながら、今までの自分の経験から推測し、出来るだけ他人の気持ちを理解しようと想像力を発揮することこそが、人との繋がりを回復する上で最も重要であると私は考える。そして、その人との繋がりから生まれる絆を慈しみ、他人を大切に思う心が「苦悩から逃れたい」という願望に打ち勝つようになれば自死の件数は減るのではないだろうか。しかし、それは苦境に直面してからでは遅いのである。そうではなく、常日頃から自分の周囲の人々を大切に思うよう習慣づけておくことで、もし自分が苦境に陥って視野が狭くなってしまう際も無意識に周囲の人を考えるようになるであろうと考える。そしてその他を省みる気持ちが自然と行動として現れ出たならば、周囲の人々も、それに応えるように自分が苦境に陥った際に力添えしてくれるであろう。

本論文では現代日本が抱える自死問題について論じてきたが、自殺念慮を持ち、それを行うか迷うということは「自分の人生が生きるに値するか判断する」ことである。そういった意味で自死問題を考えると言うことは詰まるところ、哲学の根本を考えることであると思われる。

現在も日本は経済の活性化に躍起になっているが、単なる物資の蓄積ではなく自分の人生の問題にもっと目を向けるべきではないだろうか。欲望に際限はなく、そこから離れることは出来ないことを認めつつも、周りに心を配ることを忘れずに、自らに降りかかる苦悩を超えてゆくことで、人は錬磨されてゆくのではないかと考える。

註

(1) 佐々木信幸『自殺という病』四七一―四八頁

- (2) 布施豊正『死にたくなる人の深層心理』七九―八〇頁
- (3) 加藤尚武『応用倫理学のすすめ』一〇九頁
- (4) 佐々木信幸『自殺という病』六〇―六二頁
- (5) 上野正彦『自殺の9割は他殺である』九〇頁
- (6) 『真宗聖教全書』四 二六〇頁
- (7) 鍋島直樹『自死を見つめて…死と大いなる慈悲』一〇〇―一〇一頁
- (8) 『親鸞聖人御消息』第十六通（『浄土真宗聖典（註釈版）』七七―一頁）
- (9) 『昭法全』五九七頁
- (10) 『昭法全』六五七頁
- (11) 『信卷』（『真聖全二』・七四頁）
- (12) 『歎異抄』第九条（『浄土真宗聖典（註釈版）』八三七頁）
- (13) 梯 實圓『歎異抄 現代語訳付』三七―三八頁
- (14) 『歎異抄』第十三条（『浄土真宗聖典（註釈版）』八四二頁）
- (15) 『歎異抄』第十三条（『浄土真宗聖典（註釈版）』八四四頁）
- (16) 梯 實圓『歎異抄 現代語訳付』六二頁
- (17) 梯 實圓『歎異抄 現代語訳付』六六頁

- (18) 田代俊孝『親鸞の生と死 デス・エデュケーションの立場から』二三一―二三二頁
- (19) 藤能成『現代社会の無明を超える 親鸞浄土教の可能性』二〇頁
- (20) 佐々木信幸『自殺という病』四三頁
- (21) 『歎異抄』第十三条（『浄土真宗聖典（註釈版）』八四三頁）
- (22) 『歎異抄』第四条（『浄土真宗聖典（註釈版）』八三四頁）
- (23) 梯 實圓『歎異抄 現代語訳付』二四頁
- (24) 田代俊孝『親鸞の生と死 デス・エデュケーションの立場から』二二一―二二二頁
- (25) 大野裕『メンタルヘルスとソーシャルワーカーによる自殺対策』一三九頁
- (26) 藤能成『現代社会の無明を超える 親鸞浄土教の可能性』二〇頁
- (27) 佐藤雅彦「倫理規範としての仏教の役割―安楽死・自殺ほう助と不殺生戒―」六四頁

資料

- (資料1) 上野正彦『自殺の9割は他殺である』六九頁 (資料2) 佐々木信幸『自殺という病』六三頁



参考文献

上野正彦『自殺の9割は他殺である』

株式会社カンゼン

二〇一二年

- 須原一秀『自死という生き方―覚悟して逝った哲学者』 双葉社 二〇〇八年
- 鍋島直樹『自死を見つめて…死と大いなる慈悲』 本願寺出版 二〇〇九年
- 鷲田小彌太『あの哲学者にでも聞いてみるか―ニートや自殺は悪いことなのか』 祥伝社新書 二〇〇七年
- 田代俊孝『親鸞の生と死 デス・エデュケーションの立場から』 株式会社法蔵館 二〇〇四年
- 加藤尚武『応用倫理学のすすめ』 丸善株式会社 一九九四年
- 布施豊正『死にたくなる人の深層心理』 はまの出版 二〇〇四年
- 梯 實圓『歎異抄 現代語訳付』 本願寺出版社 二〇〇二年
- 藤能成『現代社会の無明を超える 親鸞浄土教の可能性』 株式会社法蔵館 二〇一三年
- 鍋島直樹『死を超えた願い―黄金の言葉』 龍谷大学 人間・科学・宗教  
オープン・リサーチ・センター 二〇〇六年
- 鍋島直樹・内藤知康『いのちの重さを見つめて―自死と悲しみと死を超えた慈愛―』  
龍谷大学 人間・科学・宗教 オープン・リサーチ・センター 二〇〇九年
- 佐々木信幸『自殺という病』 株式会社秀和システム 二〇〇七年

参考文献

佐藤雅彦 「倫理規範としての仏教の役割―安楽死・自殺ほう助と不殺生戒―」

鍋島直樹 「親鸞における死の把握」 『真宗研究』 二〇〇四年  
『仏教思想の受容と展開（第2巻）』 二〇〇四年  
『真宗研究』 三七輯 一九九三年